

# 幼稚園教育実習の連続4週間実習プログラムの検討(1)

## —実習計画と日々の「実習目標」から—

新井美保子（幼児教育講座）

### I. 問題の所在と目的

幼稚園教諭免許状の取得には、教育職員免許法施行規則第6条第1項の規定により、1種免許状、2種免許状のいずれにおいても5単位分の教育実習の履修が必要とされている。その中に「事前及び事後の指導」1単位を含む必要があるため、実質の実習単位は4単位となる。4単位の履修には通常4週間の実習を課している養成校が多いと考えられるが、学則及び学内規程の定めにより例えば3週間で4単位と認定する等の養成校もある。また、4週間を例えば2週間ずつに分割したり、1週間と3週間に分割したり、さらに1週間を1日ずつに分割して週1回、5週間に渡って実習を行うなどの場合もある。実施時期も学年を超えて合計4週間とするなど、4単位の扱いには養成校独自の目的が表れたものになっている。

実習単位と実習時間との関係については、大学設置基準第21条に「各授業科目の単位数は、大学において定めるものとする」との記載に続いて「2 前項の単位数を定めるに当たっては、1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、授業の方法に応じ、当該授業による教育効果、授業時間外に必要な学修等を考慮して、次の基準により単位数を計算するものとする」とあり、「講義及び演習については、15時間から30時間までの範囲で大学が定める時間の授業をもって1単位とする」こと、「実験、実習及び実技については、30時間から45時間までの範囲で大学が定める時間の授業をもって1単位とする」ことが明記されている。これらの規定に従えば、実質的に最低30時間の実習時間を確保すれば基準を満たし、残り15時間は実習時間外に必要な学修等を行うことにより1単位45時間の学修をしたことになる。実習時間外の学修としては、例えば、帰宅後や休日に実習記録や指導案の作成、教材研究・教材製作を行う等が想定されるだろう。4単位分の最低必要な実習時間である120時間を確保するためには、実習先で平日8時から17時まで8時間勤務（途中1時間の休憩）をした場合、計算上は15日間の実習が必要となり、3週間で実習を終了できることになる。また、その場合は実習時間外に60時間の学修が必要になり、例えば15日間で分割すれば1日当たり4時間の学修時間となる。

本学の幼稚園教育実習は従来4週間実習を実施してきたが、近年3週間化の動きがあり、4週間実習と3週間実習との学びの違いについて明らかにする必要があると考える。

本学幼児教育選修の4週間連続実習の時期は、3年生9月下旬から10月にかけてであり、学生25名が名古屋市にある本学附属幼稚園と県内公立幼稚園（又は認定こども園）に半数程度ずつに分かれて、それぞれ4週間実習をする。学生はこの実習以前に、保育士資格取得のための保育所実習（2週間×2回）、児童福祉施設実習（10日間）を経験しており、3年生の秋に行うこの幼稚園実習は、言わば保育者になるための最後の総実習と言える重さを持つ。時期的にも実習後には進路決定を控えており、ここでの経験をもとに学生は保育職に就職することの是非、また、保育職の場合でもどのような園への就職を目指すのか、将来どのような専門家として生きていくのかなどの最終判断をすることになる。

このような重要な幼稚園実習であるが、その4週間の内容は実際のところ実習園に一任していると言える。実習は当然、実習園の状況に応じた内容となるので、園の教育方針や期間中を含めた前後の行事予定、園の規模、園環境、幼児の状況などが関係して、養成校が考える一律の実習プログラムを実施することは難しいと考えられる。責任実習（部分指導案や日案を作成した上での実践）を実施することや、観察実習・参加実習別の記録の提出回数等は決められるが、学生が4週間の中でどのように学びを蓄積し実践力を身に付けていくのか、その具体を養成校と園が詳細に打ち合わせて実習プロ

グラムを作成し実施しているとは言えない。本学の場合、附属幼稚園以外は全て公立幼稚園・認定こども園であるので、保育方針など一定程度の統一した実習内容が共有できているものの、前述のように各園と実習生の状況に応じた実習内容が展開されることになる。

この状況に関連した先行研究として、4週間連続実習の具体的実習内容を扱った論文は見当たらない。昨今、養成校の実習に関する研究は多い。例えば、「指導案」や「日誌」への指導法や事前指導のあり方、保育者の指導法に関する研究、学生の学びを実習前後で比較する研究、特定の保育活動の指導に関する研究、そのために必要な学生の技術に着目した研究、実習に伴う学生の意識の変化や保育者効力感との関わりに着目した研究など、実習をテーマに実に多面的に幅広く取り組まれている。研究方法としては実習経験を実習後に振り返る手法が多い。その中で、4週間の連続実習自体を研究対象としているものは極めて少ない。

その中で米沢ら<sup>1)</sup>は、4週間の教育実習（幼稚園、小学校、中学校が対象）において、開発した「教育実習支援システム」により、実習中の実習生の映像をアップロードして「振り返り（アセスメント）」を容易にし、続いて自ら職能成長に対する観点別の「目標設定」を行い、「改善点の把握と改善策の提示」を行い、「実践デザイン（指導案・教材の作成）」を行う循環型の教員養成モデルを目指すなど、実習生を支援する取組みを報告している。学生の省察力と課題解決力により自己成長できる教員を支援するシステムとしての効果は期待できるが、残念ながら学生が具体的に4週間をどのようなプロセスを辿って成長していくのか、その過程は明らかにされていない。

また、高橋<sup>2)</sup>は2年次の「幼稚園教育Ⅰ」（通年、2単位）と3年次の「幼稚園実習Ⅱ」（3週間、3単位）における学生の学びについて、両者の違いや学びの流れに着目した研究を行っている。実習後の「ふりかえりシート」の分析を通して、両者の違いとして、実習Ⅰでは初めて子どもと本格的に接することを反映して「幼児理解に関すること」の記述頻度が高く、実習Ⅱでは「保育の技術・方法・内容」や「子どもへの接し方」が多いことや、実習Ⅰでは記述されなかった「家庭や保護者に関すること」が登場すること等の違いを指摘している。また、保育者に必要な資質に関して、実習Ⅰでは「細かい気遣い」「臨機応変さ」「予測する力」「計画性」などが挙げられたことに対し、実習Ⅱでは「積極性」「広い視野」「表現力」「体力」などクラス運営上担任として必要と思われる資質が挙げられていることを指摘している。これは4週間連続実習ではないが、実習を通じた学びや気づきの深まりの具体的な項目として参考になると考えられる。

そこで、本研究では、学生が4週間を通して日々どのように学びを深めていくのか、そのことに4週間という連続性がどのような意味を持っているのかという点を検討したい。その中で特に今回は、毎日どのような課題をもち幼稚園教育実習に取り組んだのか、そのプロセスを学生の実習記録から明らかにすることを目的とする。

## Ⅱ. 本学の幼稚園教育実習の概要

### 1. 実習目的・目標

本学の実習の手引き<sup>3)</sup>によると、実習の意義として「幼児教育の基本について、具体的に自身の経験を通して理解できるようになる」ことを挙げている。そして、そのために「実習生は、一人ひとりの幼児をじっくりとよく見ることを学び、また指導・援助の方法について自ら考え、少しずつでも習得するように心がけて」いくことを求めている。また、実習に対する基本的な心構えとして、幼児の主体的な活動を大切にしている幼稚園教育であるため、「子どもが今感じている気持ち、興味などを敏感に感じ取ると同時にお互いに気持ちを通わせることにより、子どもの成長を支え、促すことが重要となる。そこでは子ども一人ひとりの育ちに目を向けると同時に集団の育ちにも気を配らなくてはならない」と述べている。教師主導型ではない保育の実践を身に付けるためには、より一人一人の子どもの心情や興味・関心、育ちの状況等をよく観察し理解することが、学生が保育実践する上でも前提として重要であることがわかる。

## 2. 実習方法別の目的・内容

### (1) 観察実習の目的と内容

観察実習においては、「実習園の幼児や教師の行動ならびに保育場面の施設・設備とその活用のされ方を観察し、その園の保育がどのような意図で行われているかを理解する」ことを目的としている。具体的には、以下の5点が観察の視点として挙げられている。

- ①園の保育方針、保育方法が現実にとどのように展開されているかを観察によって確かめる。
- ②一人ひとりの幼児を理解するため、幼児がどんな場面でどんな行動をしているかを幼児の立場に立って観察する。
- ③学級全体の幼児の人間関係を理解するために、個と集団の関わり方、特に好きな遊び場面における友だち関係について観察する。
- ④教師の行動を理解するため、教師が幼児に対して、どんな場面でどんな働きかけを行ったか、またそれに対して幼児がどう反応したかについて観察する。
- ⑤幼児の行動と環境との関連を理解するため、幼稚園の環境、教師の行う環境設定と幼児の活動との関係について観察する。

以上の通り、保育室内外の物的環境に関する観察や、幼児個人および集団についての行動観察、教師の保育行動への観察など、観察を通した学びは多岐にわたる。実習当初だけではなく、実習生が保育実践した後に、省察的視点を持って改めて指導者の保育を観察する価値も大いにあると考えられる。何のために観察をするのか、またその観察内容を具体的にどのように自らの実践に生かすのかという自己課題を明確にした観察は、学生の学びの深化につながるのではないだろうか。

### (2) 参加実習の目的と内容

参加実習では、「幼児の生活の中に入って、担当教師の保育活動の一部を分担しながら、幼稚園教育の実際を経験的に理解する」ことを目的としている。保育を補助するためには「あらかじめ担当教師の指導・助言を受け、参加内容・方法について十分な理解をもって行わなければならない」こと、「想定されている保育のねらいを理解しておくこと」などが求められる。保育記録には、「参加した場面の状況、幼児たちの様子、活動の流れ、教師の関わりの様子、関わりの流れ、自分の参加の内容・意図や考えなど」を記録する。特に、「幼児たちの気持ちや考えをどのように読み取ったのか、そして自分がどのようなねらいで働きかけたかということは、重要な観点」と述べている。このように参加実習では、観察実習で理解した個々の子どもや集団での子どもの状況、保育や活動の流れなどを意識しながら、子どもの登園から降園までの様々な状況に対し、どのような意図をもって援助するかが問われることになる。そこには個人・グループ・クラス全体など保育形態が異なる場面での子どもへの関わり方や、登園・降園時の身支度や食事、排泄等の生活場面、遊び場面、行事などへの子どもへの関わり方、環境構成の方法などが含まれており、結果として、子どもへの理解や状況把握は適切であったか、援助の意図は適切であったか、意図にそった援助ができたかなど、様々に試行錯誤しながらよりよい実践方法を考察し探究することになる。従って実習生は、その時々「教育的意図」に根差した自らの課題を日々明確化し、試行錯誤しながら参加実習に臨むことが充実した学びにつながると考えられる。

### (3) 責任実習の目的と内容

責任実習では、「担当教師の指導のもと、実習生が主体的に責任を持って、保育という教育活動を行うこと、さらに直接の保育経験をもとに保育のあり方を具体的に考えていくこと」を目的とし、「観察・参加を通じ理解した幼児の実態をもとに、指導案を立てることが実習の最初の課題」と述べている。そして、「実習後、自身の実習について反省すること、実習を観察していただいた先生や指導教師の指導を受けたり、実習生同士意見を交換し合ったりして、保育の方法について学ぶことが実習の大切な部分」としている。責任実習としては、部分実習、半日実習、一日実習、研究保育が具体的には想定されている。ここでは指導案の立案や実践も大切ではあるが、むしろ実習後の実習生同士の意見交換や教師等からの指導・助言により、省察や保育改善の視点を持つことが重要

であると言える。

### Ⅲ. 実習記録による分析

#### 1. 調査対象

2019年9月24日(火)～10月18日(金)の幼稚園実習に参加した3年生25名中、本調査のために任意で提出された21名分の実習記録を調査対象とする。内訳は、附属幼稚園10名(3歳児組3名、4歳児組4名、5歳児組3名)、公立幼稚園又は認定こども園11名(3歳児組2名、4歳児組2名、5歳児組7名)である。提出にあたっては、倫理的配慮として研究目的及び個人情報公開しない旨を説明し、提出は自由意志とした。

#### 2. 実習計画について

まず、実習先の1つである愛知県内の公立A認定こども園、B幼稚園、附属C幼稚園の4週間の実習計画表を例として示す(表1, 2, 3)。これらの表は、2019年度に実習園で作成された計画表を基に、実習生の実習記録から判明した事柄も補足して筆者が作成したものである。

##### (1) 実習日程について

4週間実習ではあるが、9月下旬から10月にかけてのこの時期は、祝日が2日入ることに加え、運動会が開催されるために代休も生じて、かなり変則的なスケジュールであることがわかる。実習日数は、Aこども園は19日間、B幼稚園は17日間、C幼稚園は18日間である。単位認定上15日間は不可欠であることを考えると、祝日に伴う不足分の2日間で4週目にずれ込み、3週間では実習時間の不足が生じることが予想される。また、運動会の開催日に注目すると、Aこども園は1週目の週末(5日目)でその後は通常の保育を経験できるが、B幼稚園は運動会が3週目の週末(15日目)であり、4週目は代休もあって3日間の保育に留まっている。C幼稚園は2週目の週末(10日目)に運動会があり、3週目、4週目共に4日間の保育となっている。このような実態からは、祝日や運動会という大きな行事が含まれる時期に実習する場合は、15日間の日程確保や通常の保育を学ぶためにも4週間という期間が必要であると言えるだろう。

表1. 教育実習計画書1

(Aこども園・5歳児より)

	日数	曜日	行事等	実習方法	実習内容等
第1週	1	火		観察	
	2	水		観察・部分実習	降園
	3	木		観察・部分実習	朝の受入れ
	4	金		観察・参加	
	5	土	運動会	観察・参加	
第2週	6	月		観察・部分実習	給食
	7	火		観察・部分実習	降園前の集まり
	8	水		観察・参加	
	9	木		観察・部分実習	朝の受入れ
	10	金		観察・部分実習	給食
第3週	11	月		半日保育	給食後～降園
	12	火		半日保育	朝の受入れ～給食
	13	水		一日実習	
	14	木	遠足	観察・参加	
	15	金	お別れ会	観察・参加	
第4週	16	火	芋掘り	研究保育・参加	
	17	水	内科検診	半日実習・研究保育観察	給食後～降園
	18	木	誕生会	観察・参加	
	19	金	お別れ会	一日実習	

\*実習園の計画表を基に実習記録で補足して筆者が作成

##### (2) 実習方法について

Aこども園は初日だけが観察のみで、2日目からは観察に加えて部分実習が始まっている。日課である「朝の受入れ」「降園前の集まり・降園」「給食」を1・2週目で1～2回ずつ部分実習し、指導教諭の保育実践も観察しながら実習を進めていく様子がうかがえる。3週目は半日実習として「朝の受入れ～給食」「給食後～降園」を実習し、続いて一日実習を行う。その後は行事が続く中、4週目には研究保育と他の実習生の研究保育の参観、再び半日実習と一日実習を経験して終了となる。4週間で一日担任まで習得できるようにプログラムが計画的に組まれている様子がわかる。もし、これが3週間となると、4週目で実施している研究保育が3週目に繰り上がることになり、3週目の実

習の負担の重さが懸念されるとともに、そこでの反省点を生かして従来4週目で再度半日実習や一日実習に取り組んでいた学びが困難になると考えられる。

B幼稚園(表2)は、当初の観察実習2日間に続いて、参加実習と部分実習が12日間続き、最後に研究保育と、1日実習を行う計画となっている。3日目から始まる部分実習では、「絵本の読み聞かせや紙芝居実習」に続き、「給食指導」「手遊び」「歌の指導」「降園指導」が計画されており、それぞれ1回ずつ指導案も作成している。また、自主活動場面への参加も3日目から基本的に経験するプログラムとなっているが、自主活動場面に特化した部分実習や指導案作成はなされていないようである。B幼稚園では通常、登園した幼児は自主活動に取組み、片付け後の11時頃からはクラス全体での活動(いわゆる一斉活動・設定活動)を取り入れている。実習生は研究保育として「全体活動」部分を行うため、それに即した実習計画になっていると言える。

C幼稚園(表3)の特徴は、初日の参観に続き、参加と観察実習が基本となって最終日まで構成されている点である。この背景には、通常、各組に実習生が2名ずつ配属されるため、部分実習や責任実習は日替わりで交代しながら実施せざるを得ないことと、一日の保育の大部分(午前・午後

表2. 教育実習計画書2

(B幼稚園・5歳児より)

週	日数	曜日	行事等	実習方法	実習内容等	指導内容
第1週	1	火	運動会全体練習	観察	自己紹介、保育観察	教育方針、日課・観察の仕方、日案の書き方
	2	水		観察	保育観察	学級経営、幼児理解の仕方、絵本の選び方・読み方、絵本実習指導案作成
	3	木		参加・一部実習	自主活動参加、絵本読み聞かせ実習	絵本読み聞かせの反省
	4	金		参加・一部実習	絵本読み聞かせ実習	週の反省・次週の見通し
第2週	5	月		参加・一部実習	自主活動参加、絵本読み聞かせ実習	絵本の選び方・読み方、環境構成のあり方、壁面構成の仕方、紙芝居実習指導案作成
	6	火		参加・一部実習	自主活動参加、紙芝居実習	幼児理解と援助、紙芝居実習の反省、研究保育の内容検討
	7	水		参加・一部実習	自主活動参加、紙芝居実習	給食指導、部分実習の指導案指導、研究保育の内容検討
	8	木		参加・一部実習	自主活動参加、給食実習、紙芝居実習	給食実習反省、運動会予行練習準備
	9	金	運動会予行練習	参加・一部実習	運動会予行練習補助、給食実習	給食実習反省、運動会(行事)の考え方・進め方、運動会当日の動き、手遊びの指導案作成、週の反省・実習の見通し
第3週	10	月	園外保育(稲刈り)	参加・一部実習	手遊び実習	手遊び反省、手遊びの仕方と種類、環境構成
	11	火		参加・一部実習	自主活動参加、手遊び実習	手遊び反省、家庭との連携、歌の指導案、研究保育指導案作成
	12	水		参加・一部実習	自主活動参加、歌の指導、絵本読み	歌指導反省、歌の選び方・歌い方、教材準備、研究保育指導案作成
	13	木		参加・一部実習	自主活動参加、歌の指導	歌指導反省、壁面構成、教材準備、研究保育指導案指導・準備、週の反省・次週の見通し
	14	金	運動会準備	参加・一部実習	自主活動参加、降園指導	降園指導反省、行事への指導案、自主活動指導案作成、研究保育準備、週反省・次週の見通し
第4週	15	月	運動会	参加	運動会	運動会反省、週案立案、壁面教材作成
	16	水		実習(研究保育)	自主活動参加、研究保育	幼児理解と教師の援助、研究保育反省、自主活動指導案作成の仕方
	17	木	科学体験教室	実習(一日実習)	行事参加	一日保育反省、環境設定、教材準備、明日の保育の環境設定、教育実習のまとめ・反省

\*実習園の計画表を基に実習記録で補足して筆者が作成

表3. 教育実習計画書3

（附属C幼稚園・5歳児より）

週	日数	曜日	行事等	実習方法	実習内容・提出物等	指導内容等（担任指導・翌日準備は毎日）
第1週	1	火		参観	保護者に挨拶 壁面構想案提出	副園長講話（本園の実態・教育方針等）、 運動会打ち合わせ①
	2	水	総練習	参加	部分実習指導案提出 （降園前）	指導案指導（教務）、保健指導（養護）
	3	木	避難訓練	観察		運動会打ち合わせ②
	4	金		参加・部分実習	絵本・歌・手遊び等	週末反省会
第2週	5	月		観察・部分実習	（絵本・歌・手遊び等）	
	6	火	総練習	参加		
	7	水		参加		お楽しみ事前指導
	8	木	1年生交流	他学年観察		
	9	金	半日保育	観察		運動会打ち合わせ
	10	土	運動会	参加	日案提出（登園～降園）	週末反省会
第3週	11	火		参加		日案・半日実習案の指導
	12	水		半日実習①・参加	登園～片付け、 保護者に挨拶	半日実習反省会、日案・半日実習案指導
	13	木		観察（半日実習 ①）・参加	半日実習案提出 （登園～弁当終了）	半日実習反省会
	14	金		参加		半日実習案指導、週末反省会
第4週	15	火		半日実習②・参加	登園～弁当終了、 保護者に挨拶	半日実習反省会
	16	水	誕生会	観察		半日実習案指導
	17	木		観察（半日実習 ②）・参加		半日実習反省会
	18	金	お楽しみ会	参加	お楽しみ会、 保護者に挨拶	週末反省会

\*実習園の計画表を基に実習記録で補足して筆者が作成

とも)を「したい遊び」(いわゆる好きな遊び、自由遊び)で過ごしており、研究保育に当たる部分実習も「したい遊び」で実施することなどのためによると考えられる。「したい遊び」の援助は、環境構成や個々の幼児に即した援助が求められ、一斉活動以上に個々の幼児に対する理解や活動しているグループへの理解、遊びの展開の見通しと援助方法等を学ぶために、幼児の様子や教師の援助を観察すること、実際に自ら個々の幼児と関わる経験の繰り返しが重要になる。この過程こそ保育現場で実際の幼児に触れられるからこそ学べる内容である。C幼稚園では、2週間かけて幼児の様子や遊びの様子を理解し援助方法がある程度学んだ上で、運動会が終了した3週目より本格的な部分実習(半日実習)が開始されており、そこでの反省をもとに4週目に2度目の半日実習に取り組んでいる。なお、1人の実習生が半日実習する時には、同じクラスのもう一人の実習生は観察実習になる。また、一日実習は経験しないものの日案の作成は行っている。このままの実習生の人数を維持しながら15日間の実習を考えた場合、2度目の半日実習の実施が困難となり、1度目の半日実習の「失敗感」のまま実習を終了することになりかねない。あるいはそれを避けるために2週目、3週目に半日実習を実施するとなれば、担当クラスの個々の幼児理解・遊び理解と援助方法について学ぶ期間が不足したままで実習することになる。この間に運動会などの行事が入ってくると、一層学びが困難になると予想される。幼児の主体的な活動を保育の中心的活動とする考え方は現代の幼児教育の目指すところであり、実習ではその教育方法を具体的に学ぶプロセスをどのように保障していくか、方策を考える必要があるだろう。

### 3. 実習生が考える実習目標

次に、毎日の実習日誌に記入されたその日の「実習目標」を分析することで、学生が日々の実習において何を学ぼうとしているのかを明らかにしたい。ここでは、研究保育を40分程度の「クラス全体活動」で実施している県内公立幼稚園・認定こども園(以上を「公立園」と表記)と、「登園・した

い遊び・片付け・全体活動（歌・手遊び・絵本等）・昼食」までの半日（3時間）を実質的に研究保育として行っている附属C幼稚園を分けて分析する。分析対象者数は、日誌に目標を記載していた公立園9名、C幼稚園10名である。

日々記載された目標を読み、①学級運営・行事運営、②子ども理解、③子ども理解（行事・集団活動場面）、④教師の援助、⑤教師の援助（行事・集団活動場面）、⑥実践・援助（遊び・一般）、⑦実践・援助（集団活動・決まった活動・行事）、⑧責任実習、以上の8項目に分類・コード化し、週ごとに集計した。なお、1日の実習目標に複数の目標が記載されている場合はそれぞれに分けて分類・集計した。また、前述した通り、週によって実習日数が異なるため週別の合計数には違いがある。

(1) 項目間の特徴

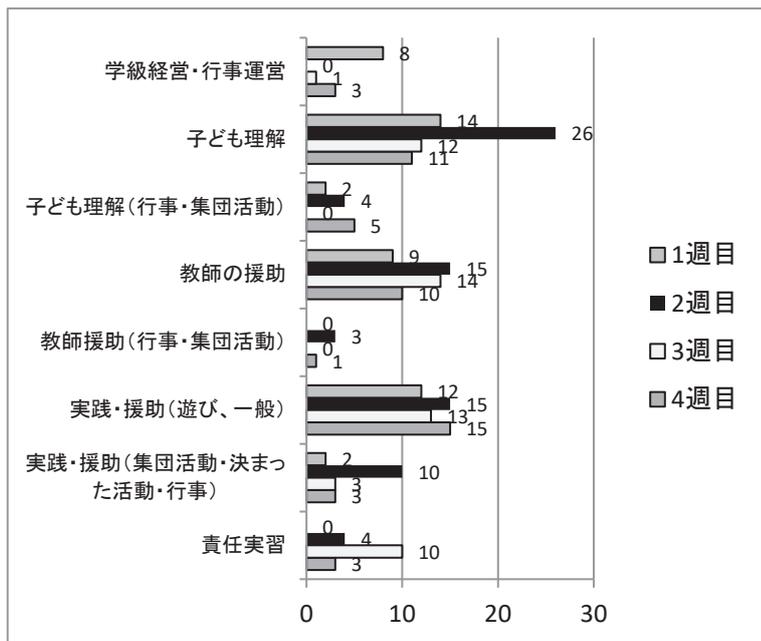


図1 C幼稚園での実習生の実習目標

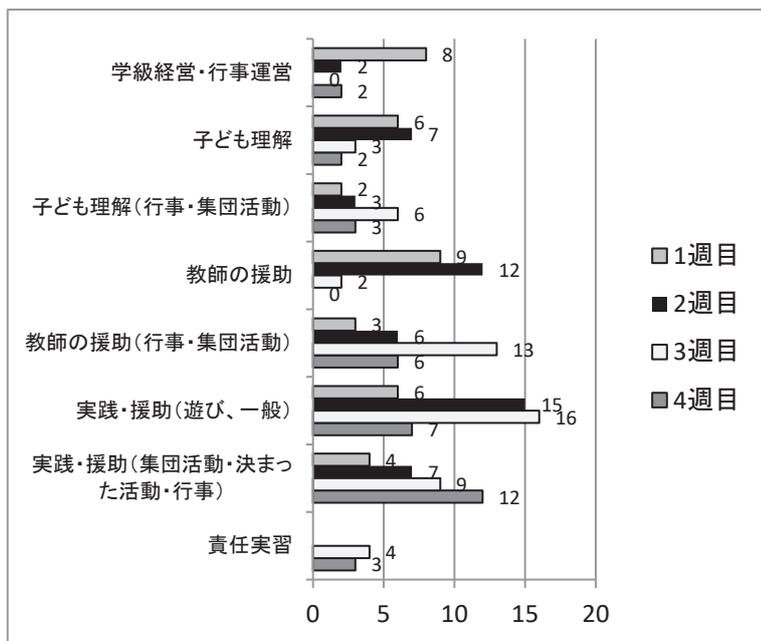


図2 公立園での実習生の実習目標

図1はC幼稚園の実習目標を、図2は公立園の実習目標を週別に集計したものである。C幼稚園で多く挙げられた目標は4週間分を合計すると、②子ども理解(63件)、⑥実践・援助(遊び・一般)(55件)、④教師の援助(48件)であり、その他の集団活動・行事等に関わる③子ども理解や⑤教師の援助、⑦実践・援助などは20件未満と少ない。子ども主体の活動を日常としているC幼稚園の保育を実践する上では、子ども理解に根差した実践・援助の積み重ねが欠かせず、その向上には教師の援助を手本として繰り返し学んでいくことの重要性が表れていると考えられ、これこそが保育現場で実習する意義であると言えるだろう。「②子ども理解」に含まれる具体的な実習目標は、例えば次頁の枠内に示す通りである。個々の子どもへの理解だけではなく、その子どもにとっての遊びの魅力や展開過程、他児や教師、異年齢児との関わり、雨天などの保育条件の違いによる子どもの変化など、その子どもを取り巻く人や物、出来事など様々な観点から子どもを理解し、保育実践に生かそうとする姿勢が示されている。一方、図2は公立園での実習目標である。同様に4週間分を集計すると、⑥実践・援助(遊び・一般)が44件と最多で、次いで⑦実践・援助(集団活動・決まった活動・行事)32件、⑤教師の援助(行事・集団活動場面)28件、④教師の援助23件と続き、その他の子ども理解に関する項目等は20件に満たない。このことから、公立園では実習中にほぼ毎日実

た活動・行事) 32件、⑤教師の援助（行事・集団活動場面）28件、④教師の援助23件と続き、その他の子ども理解に関する項目等は20件に満たない。このことから、公立園では実習中にほぼ毎日実

- ・子ども一人一人の個性や特性、発達はどうか
- ・子どもの姿から何をしたいのか、何が楽しいのか
- ・子どもたちがどこでどんな子とどんな遊びをしているのか
- ・子ども同士がどのように関わり合い、遊びを進めていくのか
- ・保育者のいない遊びの拠点での子どもの様子や遊びはどうか
- ・友達存在や保育者の関わりは遊びの中で子どもにどのような刺激を与えているのか
- ・雨の日に子どもたちがどのような思いを出し、過ごしているのか
- ・身体を思い切り動かす中で子どもたちがどのようなところ楽しさを感じているのか
- ・他学年観察を通じて、友達との関わり方の変化と、自分でできることの変化はどうか
- ・異年齢の関わりの中で、子どもたちはどのようなことを感じているのか 等

践をする機会が得られ、自主活動場面だけではなく、集団活動や食事・片付け・降園指導等の生活面の活動など、内容が決まっている指導も多く実践していることがこのような目標数に表れていると考えられる。またそこ

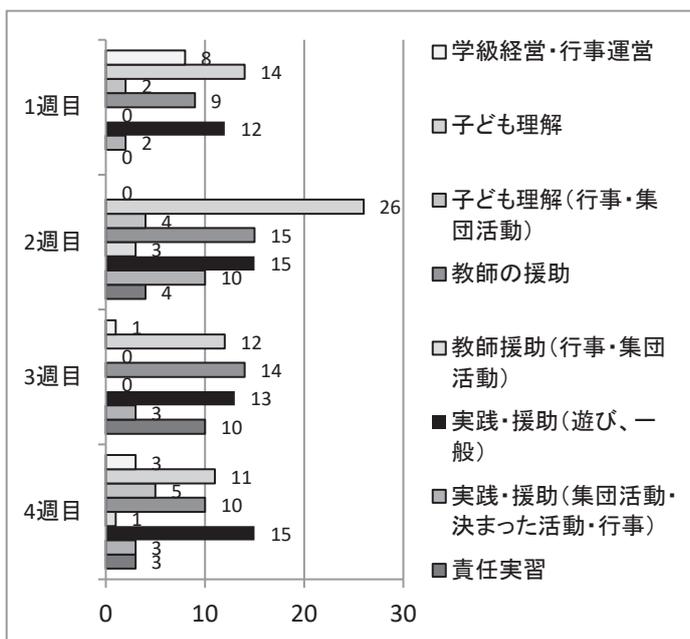


図3 C幼稚園の実習生の実習目標 (週別)

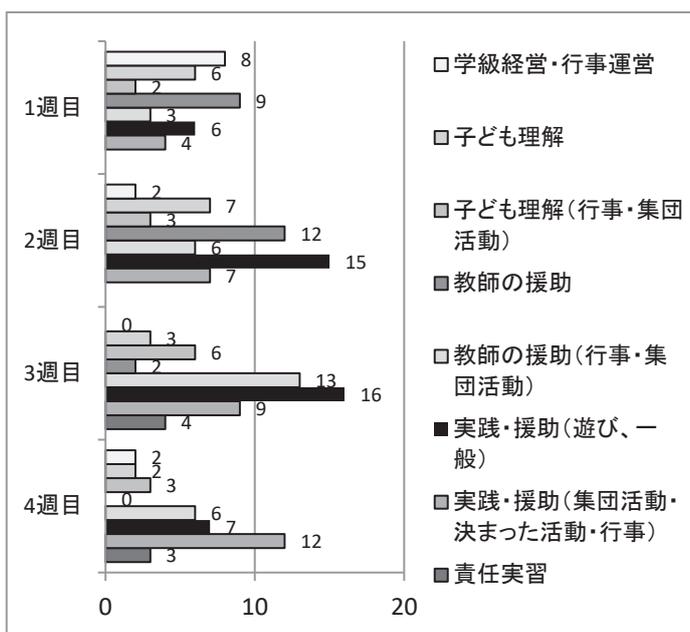


図4 公立園の実習生の実習目標 (週別)

では、保育者主導で展開する活動も多いことから、製作や歌、運動など様々な内容の活動についてどのように活動を進めていけばよいか教師の援助方法から学びながら繰り返し実施し、実践力を向上させていると考えられる。⑦実践・援助(集団活動・決まった活動・行事)の目標が週ごとに増加していることから、集団活動への実践力育成が重視された実習になっている様子がうかがえる。

(2) 週による特徴

図3、図4は、それぞれ図1・2を週別に表示し直したものである。これを見ると、第1週はC幼稚園、公立園ともに①学級経営・行事運営が他の週に比較して多くなっているが、これは初日にほぼ全員の実習生が「一日の保育の流れを知る」ことを目標と挙げていることによる。

C幼稚園では、2週目に②子ども理解が特に多くなっているが、④教師の援助、⑥実践・援助(遊び、一般)は各週において変わらず多い状況が続いており、②と合わせて週による差はあまりみられない。

一方、公立幼稚園では、2週目は⑥実践・援助(遊び、一般)、④教師の援助が多いが、3週目になると⑥実践・援助(遊び、一般)に続いて⑤教師の援助(行事・集団活動)と⑦実践・援助(集団活動・決まった活動・行事)が増加し、4週目は⑦実践・援助(集団活動・決まった活動・行事)が1番多くなっている。このことは保育者主導の保育形態による責任実習が影響しているものと考えられる。そして1・2週目は6~7件みられた②

子ども理解も3・4週目にはほとんど挙げられなくなり、実習生の学びの関心が子ども理解から集団活動の実践方法に移っている様子がわかる。

#### IV. まとめ

4週間の実習状況を分析すると、まず、週数としては4週間あるものの、祝日や運動会の代休などの影響により実質的な日数は18日程度と少ないことが明らかになった。今後もしこの時期に15日間の実習を確保しようとするれば3週間では不足すると考えられる。

また、実習生の学びについて日々の実習目標から分析した結果、実習園が保育目標・方法・内容としてこの時期に何を主眼としているのか、また、部分実習や研究保育で何を行うのかという点が、実習生の学びに大きく影響すると考えられることがわかった。つまり、行事に向けての集団活動が多かったり部分実習や研究保育で教師主導型の保育を実践したりすると、個々の子ども理解よりも、集団活動に対する教師の援助方法や実習生自身の集団活動での援助のあり方が重要な学びの対象となり、4週間かけてこの点を学修することになる。もちろん日々の保育では教師主導で保育を実施する場面やクラス全員で行動する場面も多いので、その点の学びも必要である。しかし、一方で本実習は「幼児教育の基本について経験を通して理解できるようになること」を目指しており、本来は「一人ひとりの幼児をじっくりとよく見ること」ができる態勢として4週間という長期間の実習を設定していると考えられる。幼児教育の基本に則った保育とは何かを改めて問い、そのためにどのようなプロセスで実習すればよいのかを実習園と養成校で検討することが求められているだろう。

C幼稚園では日頃から幼児の自発的な活動である遊びを保育の中心としてきた。しかし、今回の結果を見ると、その保育方法を学ぶことは簡単ではないと言える。子ども理解の面でも実習すればするほど疑問が生じ学びたい観点が生まれてくる。そこで担任教師のその幼児や場面に対する援助方法を手本として学ぶ必要が出てくる。そして実習生もまた実践し、そこで生じた疑問や迷いをまた教師の行動から学ぶという、「子ども理解・教師の援助の観察」と「実習生の保育実践」の往還の必要性も示唆された。この往還が日々可能である点が実習の持つ良さであり価値である。

今後は、実習目標及び実習記録の記述内容の分析をさらに進めて、実習生としての4週間実習の学びの深まりを考察していきたい。

#### 〈引用文献〉

- 1) 米沢崇 (奈良教育大学職能成長プロジェクト)、他 (2012) 「職能成長養成モデルに基づく教育実習の取組における教育実習生の学びの足跡－教育実習アセスメントプロジェクトの実施とその可能性－」奈良教育大学教育実践開発研究センター研究紀要第21号、131-138
- 2) 高橋真由美 (2009) 「幼稚園教育実習における学生の学びに関する一考察 (2) - 幼稚園実習Ⅰと幼稚園実習Ⅱの学びの比較から -」藤女子大学紀要第46号、第Ⅱ部113-118
- 3) 愛知教育大学教育実地研究専門委員会 (2019) 「教育実地研究 (教育実習) の手引き 幼稚園編」愛知教育大学